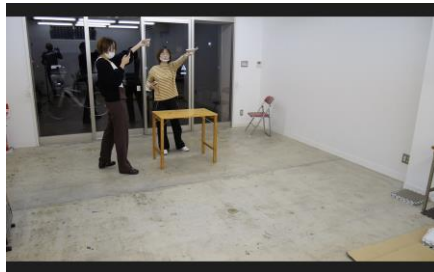


■演劇コンクール・稽古場アンケート！ 【劇団灰ホトラ】

第11回せんがわ劇場演劇コンクール出場団体の稽古場情報を配信！

全5団体、順不同でお届けします。

今回は、【主宰】の【荒木聡志】さんにお話を伺いました。



●「劇団の成り立ち」を教えてください。

【荒木】学生を終えた頃、漫画家のアシスタントをしていました。その仕事の関係で、演劇をやっている人に多く会うようになり、興味を持ちました。そして20歳頃に立ち上げたのが劇団灰ホトラです。劇団名は、なるべく意味はないけど元気な名前にしたく、スイス民謡の「おおブレネリ」の歌詞にある「ヤッホー、ホトゥラララ」の部分から「ホトラ」を。それだけだと寂しいので、色の名前をつけて、「灰ホトラ」となりました。

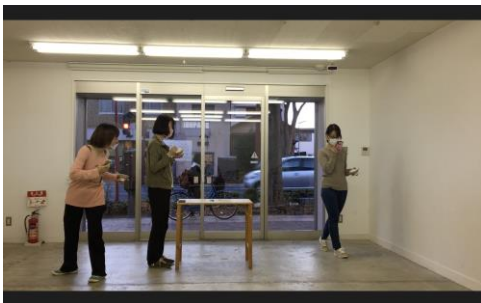
●活動について聞かせてください。

【荒木】コロナ禍で、公演が難しかったこともあり、動画作成を行いました。屋外で俳優と撮影を行い、5〜6分くらいの作品を連作でYouTubeにアップしていました。また、アーツ前橋でのサポートプログラムに参加させていただき、半年くらいスタジオで創作活動に取り組み、今年2月に短編の発表も行いました。

●コンクール参加の動機は？

【荒木】本音を言うと、評価が欲しいという一点です。活動している群馬県では、現代演劇に関心のある人が少ないので、世の中に承認され、求心力を増していくことを目標としないと、活動を続けるというのが困難な状況ではあります。

●今回は、どんな作品でしょうか？



【荒木】チラシには、日本国憲法の全文を役者の台詞として扱う作品と書かれており、それを聞くと、政治的主張が強い作品に思われる人も多いとは思いますが、政治性や社会性が不明瞭で、うまく言葉に出来なかったり、スタンスを決められなかったりするような人々を描きたくて、作品をつくっています。今回、敢えて、その政治性のシンボルみたいなものに出会わせると、良い効果が得られるのではないかと考えています。普段自分たちがどのように無自覚に社会や政治を捉えているのか、形にしてみたいという気持ちも強いです。

●今後の展望は？

【荒木】元々小作品が多いので、例え規模が小さくても、気の合う俳優と一緒にどんどん作品を作っていけたら良いと思っています。今後、(コロナの状況が続き)制約が色々あったとしても、その制約の中でも自分のやりたいことを見つけて、少しずつ姿を変えながら続けていけたらいいですね。ずっと群馬で演劇をやっているので、例えば海外とか、どこかに出かけて行って、新たな人と作品が出会ってくれたらいいなとも思います。

【担当コメント】

淡々と、丁寧な言葉でインタビューに答えてくださった荒木さん。インタビュー内でも、繊細に言葉を扱っているような印象がありました。コンクールでの作品の台詞が、日本国憲法。それだけでもう興味を惹かれますが、そんな荒木さんとメンバー達とが、日本国憲法の言葉たちにどのように向き合い、どのような舞台上になるのか、非常に楽しみです。

【劇団灰ホトラ：5月30日(日)】 担当：一宮周平